

四万八千日

有明ありあけの蚊帳の中に黒い影が動いて、抜け出した體に冷たくなつた搔卷かいまきをふわりとかけられた時、一寸びっくりして薄目をしたのが、それも知らないで女の子は猶眠なみつた。

夢もない——それから暫く過たつた。

ちんと一つ佛壇に鉦かねの音が小さく澄んだ。線香をたてゝ合掌する時や、煮ものゝお初はつめや何か、ものを供へる時に打つ鉦かねの音である。それと、なんとはなしに迫つた人の氣けはひに、女の子は幽かすかに目をあいて見た。まだ暗い、と思ふともなしに思つて、玩具おもちゃの相撲のやうに兩手を舉げて寢て居た手を、軽い搔卷かいまきの中に入れて足を伸した。

其時、さやさやと蚊帳が揺れて、人が唐紙からしを擦すつて黒い影が通つたやうに思はれた。女の子はまた眠つた。

とんとん とんとんとん とんとんとんとん……

とゝ とゝとんとん とんとん とんとん

ゆるい、それでも忙せはしげな、初めは何處から來るともなしに起つた音が、入いるともなしに入らぬでもなしに耳にはひる種々さまざまなもの音を統すべて、夢ともなく現うつともなしにだんだん目醒めを誘つて來た。ばかりと目をあいて見ると、すでもう窓は白んで、俄に其處にやつた目が一寸痛い。目をこすると目許めやににごろりと目脂めやにがあつた。それを取らうと二本の指をたてゝ骨を折る。さつさつと表を掃く箒はらひの音や總べて日の營いとみの初めの聲がすがすがしく耳にはいる。

とんとん とゝとんとん とんとん、襖を二重隔てゝ天井の高い部屋に響く音が、大きな俎まないたの前まへに屈かがんで、大きな包丁を持って子育て桑を叩いて居る母のまんまるい形を思はせる。二三日前に夏蠶なつこを掃いてから、朝な夕なに其音を女の子は聞いた。

むっくりと起きて腹掛け一つのまゝ、蚊帳を捲まくつて、

『おつ母かちゃん』と唐紙からしをあける。

『あい』とおつ母かさんは振り向いた。

『起きたのかい』

おつ母かさんは此時はもう桑かけをすつかりすました後と見えて、棚にかけ渡した藁蓋わらぶたの一枚に手をかけて、うようよと蠢うごめいて居る黒い虫の上に目をやって居た。片手に捧げた燭臺しょくだいに涙が流れて、黒く心の溜しんった蠟燭ろうそくの火がパチパチ言った。紙帳しちやうでぐるりと囲んだ部屋の中は薄暗く、温氣をんきに混じた蠶糟こかすのほひが頬から鼻を打つ。片側の棚には春蠶はるこの残りの白い大きなのが、わさわさと音をたてゝ桑を喰はむで居る。おつ母かさんは其方も一寸覗いて見て、柱にかゝって居る寒暖計をのび上るやうにして見た。

『さア着物を着るんだぞい』

明るい部屋に出て來ると色の薄くなつた蠟燭の火をふっと消した。白い細い煙けぶりがすうとたつて消える。

附け紐を通す時に一寸脇の下にさわつた手が暖いやうな氣がした。やがて臺所へいって顔を拭ふいて貰ふ。おつ母さんは其手拭ひで猶胸のあたりに味噌汁などがこびり付いてるのも拭いてくれた。

『さア目ざまし』とおつ母かさんは佛様の上に乗つてた袋をめくつて饅頭を出してくれた。それは恰度ちやんせナポレオン帽みたいな形をした小さな金鏢きんつばみたいなものである。女の子は嬉しがった。

『なアにこれ』

『おつ母かちゃんが今朝四萬八千日に觀音様にお參りに行つて買つて來たのえ』

『四萬八千日ってなアに』

『四萬八千日って觀音様のお祭りなのえ』

『いつ?』

『今日、朝はやアく夜が明けないうちに皆なお參りに行くの、からころからころって朝早くから下駄の音がするよ』

『みんなが行くの?』

『あゝ』

『子供も?』

『あゝ だけど大抵は大人ばかりなのえ』

『観音様って何處にあるの』

『妙林寺ってお寺にあるのえ』

『遠いの？』

『いえや』

おっ母さんは少々煩うるさくなつた。だけでも女の子はまだ腑ふに落ちない。

『四萬八千日ってなアに』

『観音様のお祭りの日だてば』

観音様のお祭りにいへばよくわかる。けれども四萬八千日って云ふことがどうしても女の子には飲み込めない。饅頭の皮を残して餡あんばかりほじって喰べながら、四萬八千日で、夜が明けない眞つ暗いうちにお參詣まみりに行く——といふことを繰り返して考へた。併し持つて居た饅頭を食べてしまふと同時に、そんなことはもう何でもないことになつてしまつた。

これは女の子が六つか七つ位の時のことである。

其後幾年も幾年も女の子はこの日のお土産を食べた。時には煎餅のこともあり焼饅頭のこともあり、時によつて違つたけれども、四萬八千日といふ言葉から受ける感じは少しも違はなかつた。

ふと目覺めて見ると、からころからころと日和ひよりや駒下駄の音が表の通りに續いて居る。

『なアに？』と先刻から目を覺まして俯伏うつぶせなつたまゝ煙草をふかして居る母に聞くと、

『今日は四萬八千日え』といふ。

まだ暗い蚊帳の中に、煙草の火が吸はるゝまゝに赤くなりまた消え、ふうとはく煙りが母の顔を這つて騰のぼるのを見ながら、時々は女の笑ひ聲などが交る表の人通りの音にちつと聞き入る。

『おっ母ちゃんも行くの？』

『あゝ』

おっ母さんは間もなく靜かに起き出して蚊帳をゆすつて出て行つた。

四萬八千日といふと同じやうな、遠い遠い感じのする感じを味はひながら、女の子はやがてまた静かな静かな眠りに入る。

女の子は造作もなく十二ばかりになった。

その年のその日、前の日から堅く約束をして目が覺めたらば一緒に連れて行って貰ふことに決めて置いた。

暁の單物ひてんにうすら寒いやうな風が身にしみて、かねがねの望みが達しられたやうに嬉しかったが、女の子は行って見て少なからず失望した。

繪行燈ゑあんどんの下をくぐる人も、兩側に並んで居る小間物店もお菓子やの店も、堂の中に流れるやうな萬燈まんとうの光りも、皆普通の縁日と少しも異ひがなかった。たゞそれが暁と夜との違ひだけなのだ。店々に大雪洞おほぼんぼりやカンテラの灯が美しく紅を着た菓子などを照らして居るのも同じである。

女の子はそれ以後再びお參詣まゐりに行かうとは思はなかった。

さうして今でも自分が行って見た四萬八千日と、床の中で考へ、お土産の饅頭を喰べながら思った四萬八千日と、別々なものであるといふやうな感じがして居る。

女の子は私である。

底本…「水野仙子全集」第二卷

初出…「中学世界」明治四十三年四月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年六月二日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)